

「心で宇宙生活を知る」

(昭和四十年 七月発行)

宇宙大自然の神の御生活を心得るならば、天は自然に我に覺らせる。人は宇宙の神の子であるから神靈の世界を知ることが人の道なのである。然しながら靈界で觀たことは現界の事とは事の趣きが異つてゐることを御承知ありたい。見方も精神的に觀るものであり、名もなく善悪もないのである。そこで人は天地萬物に名前を贈つたということを考えなければならぬ。

これによつて萬物に生命を贈つたことになり、萬物の活動が明らかとなり、萬物が有効となつたのである。

世のはじめは音がはじまりで、音によつて創造されたものなのである。即ち音は神靈元子であり、音が活動して萬物が構成されたのである。この理によつて、人間には耳が必要なのである。耳は心の機であり、音によつて言葉を聞き分けているのも、耳で聞き分けているものではなく、心であらゆることを聴き分けているのである。心にその力がある。目も口も鼻も宇宙生活を知るために與えられているのである。そしていづれも心の機なのである。精神的に觀る目であり、精神的においをかぐ鼻であり、精神的に味う口なのである。目で物を見るといわれているが、その力は目が物を見るのではない。心であらゆる物を視分けまた精神的を心で觀分けているのである。鼻もまた鼻自體がかいでいるのではない。體的にも精神的にも心の力がかぎ分けているのである。口もまた然りである。